困難だったり、もう学校行きたくないなーと思ってる人が作品を見てふっと笑って、ちょっとでも元気になったらいいな

この（去年の）夏に岡山の太一やで行われた祭りの初日に行ったところ、入り口にある木がぱっとカラフルにデコレーションされていたので思わず見とれてしまった。聖木のアートというらしく、66日間の祭り期間中ずっと展示され、最後には台風も来たが無事に祭りを護り抜いた。それを作ったのが岡山在住の若いアーチスト、ミヤケノリコさんだ。

彼女の作品はとにかく色が豊かで見るだけで楽しくなる。しかし本誌はずっとモノクロの単色印刷なので、あいにくそのインパクトある華やかさは伝えられないのだが、かわりに彼女がアーチストとしてまた個人としてどんな思いで作品を作っているかを聞かせてもらった。（あ）

ミヤケノリコさん

カラフルで可愛いものが好き！　廃材や身近なモノを使ってラブ&ピースを表現するアーチスト

―― クレイジーつけまプロジェクトというのをやっていたそうですね。

ミヤケノリコ●このプロジェクトはちょうど2年やったんです。つけまの作品というのは女の野望をつけまつげに表現するという作品で、女の子の夢とか野望とか情熱をテーマに作品をつくっていて、まつげというのは女の子がメイクするときに一番力を入れる場所だから、それをモチーフに全国から募集した111人の夢をまつげに表現したんです。彼女たちそれぞれにインタビューして、あなたの夢とか野望は何ですかって聞いて、彼女たちが答えた野望をまつげに表現して撮影したそれぞれの女性たちの実物のつけま作品をここに(111人分のつけまの集合体の女のモニュメントに)縫い付けてるんです。

私は作品を作る時に、その人のバックボーンというのが気になって、人間に興味があるから人間をネタといったら申し訳ないですけど、それで作っているんです。その時は私はアイデンティティーというかジェンダーに興味があって、自分が女っていうことでけっこう不利益なことがあったとか、「現代アートは平等だ」って言ってるけど絶対的に男性社会で（笑）、美術館の館長も審査員とかえらい人はみんな男ばっかりで、やっぱり女のくせにとか言われたことがあったから、それがすごいトラウマもあって、そうではないというか公平に見て欲しいなというのがあって、性というか女性を対象にこのときは作っていて、でも作ってみるとなんか一つ夢がかなったみたいな感じで、性へのこだわりがなくなったんです。

―― 野望を持つ女の人をターゲットにしたというのはどういう思いで？

●なんでそういう作品を作ろうかと思ったかといえば、ずっと作家活動をしているときに、女であることでふがいない思いをしたということが何度もあって一回やめて、それでまた33の時にやり始めた時も東京から始めたんですけど、渋谷アワードというコンペがあって運良く受賞できたんです。芸術家の女の子って汚い格好してぼろぼろでっていうイメージがあったんですけど、その時に受賞した女の子たちはみんなキラキラして可愛くってきれいでアイドルみたいで、おまけに自己アピール能力も強いし話しもうまいし頭もいいし、なおかつ作品も面白いから、ああそういうふうな時代なのかなって思ったんです。それはたぶん東京文化なのかもしれないですけど、審査員とか偉い人と受賞パーティにでてる時に、すごい自己アピールをガンガンしていってて、すごいなーと思って。私そういうのはできなかったから、作品だけ見てくれるって考え方は古いのかなと思って。今の子はSNSも発達してるから、SNSで自分を商品化してどんどん自分で売っていくということをしてて、言ってみたらアイドルですよね。作品以外で可愛さとか美しさを自分を売り出すためのツールとしてて、それがすごいなーと衝撃を受けて、こういう人って何考えてるんだろうと思って取材

←CRAZYつけま展のDM

次頁に続く

1頁から続く

→つけま展参加者の写真（男性のつけま姿の写真はワークショップの時のもの）

してみようと思ったんです。

それで100人に聞けばなんとなく分かるかなと思って募集したんですけど、SNSの拡散文化で意外にいっぱい応募がきて、けっきょく111人に聞いたんです。２年間かけていろんなところに行って、でもこのつけまの作品のおかげでいろんな仕事をもらったんですけど、一番最後にプロジェクトがおわって、自分はこうなれないっていうのがわかって（笑）、すっごい疲れて。メークも好きだしファッションも好きだけど、そこはけっきょく武器にはできないなと思って。そういう人はそれでありだし、それは肯定してるかな。

彼女たちもなんでそういうふうに自分を過剰にまでアピールして美しさにこだわるのかというと、やっぱり自分が女一人で活動していくために、なにを武器にしていったらいいかと考え抜いた結果、ちょっときれいだったらそれが武器になるわけじゃないですか。自分をアピールするための。究極の叶姉妹ですよね。それの一般人バージョンだというわけで（笑）、やっぱり使えるものはすべて使ってのし上がっていくのが、きっと都会の人ほどそういう願望が強いと思うんです。なにか一旗あげてやろうと思って上京していくわけじゃないですか、夢を追いかけて。じゃあ自分の才能以外に何をアピールして夢に近づけるかというと、私は可愛いとか話しがうまいとか、そういうのを一生懸命死ぬ思いでやってたんだということがわかって、それはあざといとかこびてるとかじゃなくて、自分の夢をかなえるためにやってたんだということがわかって、女の執念ってすごいなと思って、すごい勉強になったというか面白かったです。

↑太一やに飾られていたサイケデリックカラーのお面。これも餅まきの時などに使われていた。

そうそう、今ほんとに美しくなろうと思ったら、お金を稼げばいくらでもなれるんですよ。エステもあるしメスを入れたりとか。年をとるとやっぱりシワとかも出てくるけど、いくらでもお金を出していけば消していけて、いくらでも若さを保っていける人造人間みたいなカルチャーが一部であるんだなというのも知って、面白かったです。

―― 美容院に行くような感覚で整形をうける人がいるし。

●それを私は否定してなくて、その人達はそれで豊かな生活を送っているんだったらまあいいなーと思うし、自分はそこまで美しさを磨くことに時間とお金をかけれないなと。それを武器にしてのし上がっていこうとは思えなかったけど、必死で死ぬ気でそうやってる人も中にはいて彼女達の本気で夢を叶えたい熱意がすごく伝わってきました。日本人の女の子はすごいエネルギーに溢れてると思います。

すごい活力みなぎる人たちに111人も会って。こんな一地方都市に住む作家が募集しただけでそんだけの人が集まってくるんだから、もっともっといるんだろうなーって思ったら、女ってすごい！と思って。すごさと怖さを感じましたね。

そしてやればやるほど、ピュアで、そういうのを武器にせずに、欲とかしたたかさ無く生きているとろんさんみたいな人が愛おしく感じてきて（笑）。対極ですね。両方と接しているから、太一やには癒やされに行ってるみたい。

まあこの狭い日本にこんだけいろんな人がいるんだなというのがわかって面白くて。自分がどういう人に見せていきたいのかとか、どういう表現方法をしていきたいんだろうと、これを作りながら思っていて、それも違和感感じながら作ってるわけだから、そしたらやっぱり愛情豊かな作品を作りたいなと思いましたね。おもしろいハッピーになる作品を作りたいって。

それでこんど次やるのはハッピーイエイプロジェクトというもので、遺影をつくってるんです。こないだとろんさんをモデルに作ったんです。

――「まだ早い」って言われなかった？（笑）

●「死」っていうのもあるんですけど、絶対的に死ぬことはわかってるので、その中の過程で今まで体験してきた人生のバックボーンをその遺影の中に詰め込みたいというのがあって。それに無償の愛というのをこの夏に感じて、特に太一やが強かったんですけど、そういうのとかも入れ込んだ作品を作りたいなと思って、ハッピーイエイプロジェクトを今度やることにしたんです。

―― クレイジーつけまのことを中心に聞こうと思ってたんだけど、今度のプロジェクトも面白そうですね。

●前から「アートを着る」というのを軸にしていて、作品は全部身につけれるものを作ってるんです。つけまのときはパフォーマーとコラボしていて、つけまの展示を原宿でやっていたときに、フルート奏者の鈴木和美さんといっしょにパフォーマンスして、つけまつげのコスチュームを着てもらって、竹下通りでフルートを吹いてもらったんです。作品が動いたら面白いなと思って、そのパフォーマンスを展示中にずっとやっていたんですけど、ああいうところ（竹下通り）ってパフォーマーが多くて、そんなに目立たなくって、わーっとなるかなと思ってたんですけど普通で、（笑）そこまでは驚かれなかったんですよね。岡山でやったらね〜。

←原宿でのCRAZYつけま展で、パフォーマーのフルート奏者鈴木和美さんと。

●あんまり仮装とかやらないんですか？　なんか変わりたいとか、こういうふうなものになってみたいとか？　たとえば私は看護婦になりたいとか、女子高生になりたいとか、そういう変身願望が昔からすごいあって、こういうのになってみたいというのから派生して、なにか身につけて違う自分へ移り変わるというのを作品にしてて、それによって新たな内なる自分が出てきたりとか、日常と別次元を体験したいなとか思ってやってるから。

―― アートはやりはじめてからもう何年になるんですか？

●１５年ですね。２０才の時からやってるので。大学は県立大学のテキスタイルデザイン科だったから、当時は布のデザインとかやっ

てたんですが、ついてた教授が現代アートの先生だったので、こういうアートの作品をすごく評価してくれたから、作品をつくって発表して生きていこうって決めて。１５年、あっという間ですね。その間、止めてた５年間は普通に就職してたんです。その時は観光業に興味があったので、旅館やホテルで働いてました。その時、毎日お客さんが来るので、いろんな人としゃべるじゃないですか。で、人と向き合って関わるってことが面白いなと思って、それでアートの活動って最高のサービス業だと思ってて、無償で見て楽しませる行為だと思って、それは接客業なんかと相通じるなって思いました。

―― またアートの世界に戻ったのは？

●きっかけは、お父さんとおじいちゃんがダブルで死んだ年があって、2015 年に両方が立て続けに死んでいったんです。その時に、父もおじいちゃんも自分の好きなように生きて、後悔ないように人生送ってたから、まわりの人間がみな、「あんだけ好き放題したらもう後悔ないわねー」と（笑）言ってたので、その時あーっと思って、私はその時は普通に働いてたんですけど、私が死んだら後悔するかなと考えたときに、アート表現を途中で止めてしまったことが一番後悔するだろうなと思ったんです。その止めたきっかけはもう作れなくなったというか、ずーっとやってるとネタも枯渇してきて、なにをつくり表現すればいいかわからなくなってきて、やめて就職して働こうと思ったんです。

―― お父さんとおじいちゃんが急に亡くなられたのはショックだったでしょうね。

●でもずーっと病気だったんです。父はもう１０年以上入院してて、おじいちゃんはいろんなところにガンが再発して、それはもう死ぬだろうなと思ってたんですけど、同じ時期に、２月３月に続けて亡くなったんです。人が死ぬっていのちを失う悲しさもあるけど、自分の心境もすごい考えさせられたので、一人の人間が死ぬってすごい大きいことだなと。改めて自分の生き方も考えさせられ気づかせてくれたっていうか、やりたいことをもう一回やらせてくれたという意味ではお父さんとおじいちゃんに感謝してます。

―― 今やろうとしているイエイプロジェクトはその経験と関係あるんですか？

●はい、それもやっぱ関係あって、その時の遺影がふつうの業者に頼んで会館で葬式をやったので、すごい事務的で、遺影もＡタイプ、Ｂタイプ、Ｃタイプ、どれにしますか？ってかんじで、プラスいくらでこんなふうに

なりますって、すごいシステマチックで、人の生をここまで業務的にシステマチックにして。まあそこに頼んだ私ら親族の責任なんですけど、逆に笑けてきて、なんなんだこのシステムはと思って、自分が死ぬんだったらぜったい自分の好きなようにかわいいカラフルなのにしたいと思ったんです。父のときは白黒で喪に服すみたいなほんとにつまんないのが来て、いやだなーと思って、一番最後の天国に旅立つ時に集大成で送り出してほしいから、それを白黒のシステマチックな四角の枠におさめてはイヤだーっと思って、それもあって、今まで残してきたものを全部詰め込んだかわいらしい面白い遺影ができたらいいなと思ったんです。

けっきょく自分の実体験に基づいたことしか作品はできないから、それが一番説得力があって伝えれるかなと思って。でもその時もはじめは遺影を作ろうと思ったんじゃなくて、こういうの↓をぱかっとはめ込むんですけど、基本は身につける作品だから、万博記念公園の時に持って行って、今インスタ映えていうのがあるんですけど、お客さんにクレイジーコスチュームをやって下さいって

↑ノリコさんの作品はカラフルでほとんどが身につけられるものだという。

いうので、岡本太郎の太陽の塔のうしろでやってたんです。で、モデル誰にしようかなと思って、とろんさんのところに行ってやってくださいって言って、（笑）やってたら、遺影だ遺影だ〜ってことになって、（笑）そこからみんなでいろいろ遺影についてしゃべってて、そうかー、次は遺影プロジェクトにしようかみたいなノリだったんです。そっから始まったんです。

なんかとろんさんて私にとって生き神さまみたいになってて、あの人としゃべってるといい仕事が来たり、いいことが起こって、私はもう拝みに行くつもりで太一やに行くんですよ。（笑）

―― そのうち とろん神社ができそう。（笑）

●うちの父親は 10 年間精神病棟に入っていたんです。そのとき私はまだ 20 代で、父親が精神病院に入ってるのがイヤだったんです。若いから恥ずかしいというか言えなくて、なんで精神病院なんて入ってるんだよって。それは一生懸命働いてきたゆえの病気なのに隠してて、父が亡くなった時に私は 33 だったからやっと行けるようになって、お父さんの絵を描いたりできるようになってたんです。でもけっきょく父といっしょに芸術というのをやったことがなかったし、見に来てくれる状況でもないまま死んでいったんです。

それで最近たまたま私の父が入院してた病院の職員さんと出逢ったんです。話しをしていたら、私そこの作業療法士ですよと言われて仲良くなって、もし娯楽の時間とかで絵を描くとか折り紙するとかあったらぜひ呼んで下さいと言ったんです。自分が父のところに行けなくて恥ずかしかったから、ボランティアでいいからやりたいです！って話したら喜んでくれて。父が亡くなってからもう遅いけど、自分が今から作品を作っていく上でもそういうのが必要だなと思ったんです。

べつに有名な美術評論家とか美術館の館長とかに認められるためだけに作ってるわけじゃないから。豊かじゃなくて、隔離されてて、そういう人こそ芸術を欲するのに芸術がない環境で、そこでやりたいなと。そしてそれをやってからの自分の作品を見たいなと思うし、それだな！と思って。

もちろんおっきいキャリアとかも欲しいけど、そのためには自分はやるべきことっていうか見せたい人がいて、それは偉い人じゃなくて父と同じような病棟にいた人たちこそ芸術て必要だと思うんです。

心豊かになるとかきれい事を言ってても、実際そこには届いてないから、自分はそれをやっていきたいなと思って。で、同じ思いの人といっしょに活動できたらと思います。

―― 自分の作品で一番伝えたいことは？

4頁に続く

3頁から続く

●私の作品を感じることによって楽しんでもらいたいというのが一番にあって、なるべく困難だったり、明日もう学校行きたくないなーと思ってる人が、私の作品見たらふっと笑って、ちょっとでも元気になったらいいなというのが根底にあって、笑いと楽しさ、そしてこういう作品を着ることによってわーっという興奮みたいなものを届けたいなと。その三本柱があって、それをクレイジーコスチュームとかクレイジーつけまと呼んるんです。純粋に楽しんで欲しいとか喜んで欲しいというのがあって、それがないと何のために作ってるんだろうというのがあります。

ただ自分が描いて楽しいというのじゃ続かなくて、20代の時はやっぱりキャリアがほしいから大きいコンペに出したりとか有名な美術館でやりたいために、その美術館で受けそうな作品を作ったりしてたんです。でもそれだと誰のためにやってるのかわからなくて、だって人を喜ばせるために作らないと続かないなーというのがあって、見てもらっての芸術じゃないですか。ただ作ってるだけだったら量産してるみたいで、そういうのはイヤだなーと思って、考え方がだんだん変わっていったんです。

なので普通に街を歩いてる人に見てもらった時にどういう反応があるだろうと思ってパフォーマーと組んでアートをやったり。入り口を、敷居を低くしていくようになったんです。じかに反応を見たいし、なるべく美術館とかギャラリーじゃないいろんなところで最近やるようになってきたんです。それでとろんさんからたましいのかくじっけんでやってと言われた時には、もうぜひやりたい！ってやったりとか。もう場所とか人とかへだてなく見せて楽しんでもらいたいなと。私の芸術でつまんない人生がちょっとでも色づくんだったらどうぞ使って下さいというかんじです。幸せな人とか自分で生きていける強い人って、別にそういうのを見なくてもどんどん上に上がっていけるんですけど、そうじゃない環境にいる人たちに届けたいなと思って作る

←美咲芸術世界では舞台「アマンジャクの夢」出演者のコスチュームを担当 goo.gl/HkzA1y

ようになってきたのは、私の父のことがあったりするんです。

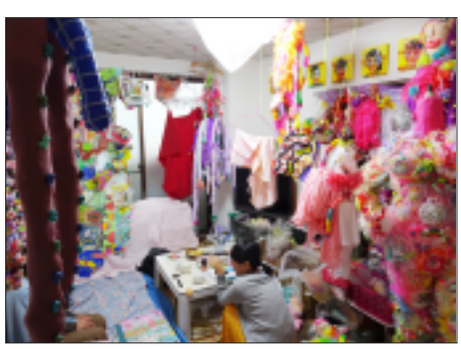
そういうのを考えていたら、愛情だなっていうのしかなくって、20代の時は愛がなかったからそういう態度をとっていたけど、だんだん年を重ねてくるとわかるようになって、結局 愛情がないといい作品が作れないし、人に対しても愛情がないとつながりが薄れていく、というのをずっと考えていて、たましいのかくじっけんをやってる時に、とろんさんとか愛だらけで、なんのメリットもないのにみんなすっごい手伝ってくれたりして、なんて愛あふれている場所なんだろうと思ったんです。それは、楽しい方がいいじゃんとか、仲良くなった方がいいじゃんと言ってたけど、東京なんかで展示してたら何かしらぜんぶお金が絡んでくるから、環境って違えば人の考え方もぜんぜん違うんだなーと思って。とろんさんのところは愛情の交換で人が動いてたから、こんなところがあるんだと思って、ほんとに無償の愛を感じたから、ここは豊かなところだなと思いました。それを今後作品に取り入れていきたいなと思ってるんです。

―― イエイプロジェクトのことをもう少し聞かせて下さい。

●つけまプロジェクトの時は111人のを作ったから、ほんとに時間がなくて、事前にメールでやりとりをした内容からつけまを作るんですが、ひとり作るのに2、3日はかかって、できたつけまを持っていき撮影して彼女たちのバックボーンの話をさらに詳しく聞く。そして実際会って感じた彼女達の人となりや雰囲気からひとりひとりの取材記事を書き、撮影した彼女たちの顔写真(つけまをつけた)と合わせてSNSにアップしていくとゆうことを繰り返していたんですが、人数が人数なので一日に３人くらいまとめて会っていて、限られた時間で撮影して話をしていて、だからもう、はい次、はい次ってかんじになって、1人15分か30分くらい話しを聞いてはい終わりてかんじで。メールのやりとりとか事務作業だけでいっぱいで作品に手が回らなくて、それがストレスだったから、今度はクリエーションに集中できるやり方でやろうと思ってるんです。一人一人の話をもっと濃厚にクォリティあげて聞きたいなと思って、だから募集をしちゃうとありがたいけどいろんな人が来て選べなくなっちゃうから、今度は自分が取材したい人にだけやってもらいたいと思って。ていねいに愛情をもってやりたいから。それとやる場所というのも総社のザジさんのところで一番最初に発表したいなと思ってて、岡山ではその旧堀和平邸。ギャラリーだと売り上げのこととかどんな人をとか、やっぱり売らなきゃーっていうのがあって、そういうのは東京でやればいいかなと思って。岡山では癒やしを求めてるから、好きな人のところでやればいいかなと思ってます。

―― 来年（2018年）は他にどんなプロジェクトを準備してるんですか？

●今作っているのは、来年２月のバレンタインデーシーズンに阪急百貨店で愛をテーマにした展示を頼まれてて（下記参照）、それが終わったら３ヶ月間フランスに行くんです。アーチストインレジデンスといって滞在製作をする企画なんですけど、こないだ岡山の美咲町でやった美咲芸術世界というのにフランスからアーチスト達が来て住み込んで製作していたんですけど、それとつながっていて、こんどは逆に私たちが行くんです。それとイエイプロジェクトが来年の軸ですね。



←インタビューで訪れた仕事場の様子。壁から天井からぶら下がるたくさんの作品に囲まれていました←

INFORMATION

「スークな祭り/スークなアートフェス」
2018.2/7(水)～2/13(火) 10:00～21:00
阪急百貨店うめだ本店 10F「うめだスーク」
中央街区の１番小屋で NORIKO MIYAKE の展示名が 「LOVE CIRCULATION 」 ラブインスタレーションを中心に、パフォーマンスとラブパレードを予定。

★連絡先：niki.s.berry.528@gmail.com
（サイト） noricomiyake.jimdo.com
norikomiyake.tumblr.com

←太一やで行われた66日間の祭り「たましいのかくじっけん」を護っていた聖木のアートの前で。→ goo.gl/cyRcDa